

優秀賞

僕らしく生きたいだけ

京都産業大学附属高等学校3年 荒木 志保

いきなりだが、僕は性的少数者だ。近年、世間一般に知られるようになって「LGBT」に代表されるが、僕はその「LGBT」の枠にも収まらない。僕の性自認は、「Xジェンダー」、男でも女でもない性だ。と言われて理解できる人はどのくらいいるのだろうか。その認知度の低さと性的少数者に向けられる差別や好奇、偏見の目こそが僕のいや、僕らの「壁」だ。

性的少数者も様々で、一概にまとめることはできないので、ここでは僕一人のことを例として挙げることにする。

まず、僕の身体は女だ。それ故に女らしさや女でいることを強要されることは少なくない。例えば制服のスカートやリボン。そして僕が最も違和感を持つのが一人称だ。ここまでまるで当たり前のように「僕」を使っていたが、社会の当たり前を適用するならば「私」でなくてはいけない。でも僕は「僕」を使う。これは僕自身が「私」で自身を表すことが苦痛だからだ。無論僕自身、一人称を僕にするまで葛藤がなかったわけではない。社会からズレることを意味するからだ。

僕は男でも女でもない。それをわがままと言う人は少なくない。LGBTを流行と言う人も増えている。それは僕らの壁を高くしている。僕は普通の青春」を謳歌したかった。しかし、女であることが苦痛で、男でもない僕が「普通」でいられるわけがない。僕は僕らしく生きたいだけなのに世間から敬遠される。僕はそれを許したくない。壁を作らず、皆が生きやすい社会を夢見てしまう。これは綺麗事かもしれないが、まずは僕のような人間の存在をより多くの人に知ってもらい、理解できなくとも否定しないでほしい。誰もが生き辛さを感じない社会こそが壁がない社会で、目指すべき社会だと考えている。

僕はこれからも僕らしく生きるだけだ。